26 自然科学史・自然観

24-11 ※自然観・宇宙観

イタリヤ文藝復興期の人々の自然観を述べるに先立つて、先づ中世に於ける世界像の変遷を概観し、之に対して如何なる当時の人々が如何なる態度を採り、又如何にして之を克復して近代に於ける自然観の基礎を築いてかを見ねばならない。中世の世界像は

アリストテレスの自然観を根本としてゐる。

アリストテレスは萬物を構成する要素として四つの元素、即ち地、水、火、風を認め、其等は軽重の性質に従つて各其他位を得て世界を為してゐると考へた。即ち土は最も重きが故に世界の中心に沈み、少しでも高から離れると再び中心に還らむとする。火は之に反して出来る丈け中心から遠ざからむとして居り、此両極の間に水と空気とがある。而して之等四元素の位置の変更によつて運動が起り、又相互的な性質の転換――例へば水が蒸発して気体になつたり、又凝結して固体になつたりするやうな――によつて変化が生じ、此運動と変化とによつて様々の森羅萬象が発生する

一經濟雜誌合綴製

となした。斯の如きアリストテレスの自然観を考察して見るに、彼の四元論はギリシヤ風に各個の元素を全体たる世界の中に於て見る、即ち全体に関聯せしめて各個のものを見ると云い得る。即ち個体が各、其性質を明白にして来れば全体の像もそれに従って明瞭になる性質のものであり、四元素は常に客観的にして且つ完全なる構成要素として考へられたものであるから、各、は互に内的関聯を有し、云はゞ同一平面（Kosmos）にあるもの

と云うて差支ない。同じ元素論でも支那に於ける五行の説――火、水、木、金、土の五元素を認める説――の如きは、吾々の生活に必要なる物質を其利用価値の見地から考へて名を與へたものであって、宇宙全体を五つの要素から成立つてゐるものとして理解しようと云ふ理論的態度から出発したものではない。

いろ〳〵な利用価値を有する種々の要素に名を附して、其等を所謂数的神秘主義（或は特別の数に特別の魔力を有すると認むるもの）から五と云ふ数によ

一橋新聞社印刷

って統合したものであるから、此等五元素の間には内的関聯がない。此等は同一平面に在く、一貫した原理の下に体系的に理解せられない。各々は別々の個体であり、それが価値概念に関聯せしめられて名を付せられたものである。斯の如く同じく世界を元素によって成立つものとなす思想であっても、其発生の事状を異にするに従って全く異った性質を有するものであるが、アリストテレスの自然観も所謂ヘレニズムの時代になると異って慾求を満足せしむる為に利用せられ、世界を構成する

諸要素に價値的な性格が加はり、世界像も変ってくる。

蓋しヘレニズムの時代には解脱の慾望が基動として起ってゐる。而も其解脱とは全く個人の解脱であって、人間一般の解脱ではない。問題は人間には神を見る力ありや、若くは神と人間とは同一になる力ありやと云ふ形式理論的関心より出づるものではなく、個々の独立せる個人が如何にして同じく独立個体と考へられて神なる実体から発生するか、又如何に

して再び神に還帰し得るかと云わ実踐的関心より発するものであつたので、其自然観も各観的に所與を体系に纏めようと云わ態度によつて造られたものではなく、神の世界に憧れて精進する人間の生活を如何にして世界全体の繪の中に嵌込んで考へ得るか、と云わこと（構成されて）が重点になつてゐる。従つてヘレニズム時代の空観（間）はアリストテレスのそれの如き実質的空間を見てゐたのではない。世界は価値の異る種々の段階から成立してゐる。吾々の世

界は有為転変の世界であり、上には遊星の世界を仰ぎ、下には地獄の世界を俯して見る。遊星の世界は即ち天使の世界、精霊の世界であつて、此世界は肉体を具備せざるが故に空間はあるが変化はない。而して此世界に於ては妨げるものなき為に運動は本来の完全なる環状形で表はれ、純粋なる運動状をなしてゐる。此精霊の世界の上には更に神の世界、絶対の世界があり、是は永遠に於ける永久の静止、精神であり、下から質料を生産する力ある世界である

一橋図書館合格印

る。要するに此段階的な世界構造の考へはプラトンの思想、即ちイデアの世界と現象の世界とを明白に切離す所謂二世界主義を根柢とし、之を宗教的熱望を満足せしめむが為に造り換へたものである。即ちそのプラトン主義の思想にヘレニズム時代の天文学を取入れて造られたものである。占星術が重視せられ始めたのは此時代である。

もともぎりシャ思想の中にも占星術に転化して行く契機が含まれてゐるかもしれない。

つた。

アリストテレスはプラトンの考へを受け継いで神を考へ、それを運動の根源となし、神それ自身は動かずして他を動かすものと見做した為に、彼の思想の中には四元素の世界とは別、異れる第五のエーテルの世界が考へられ、此エーテルの世界が更に天上の星の世界と動く水晶天球とを隔てゝ、皆星の世界を境界として起る。而して星の運動は確固たる法則に従つて動くが故に、星に依つて惹起される地上の運動も亦法則的なりと

一橋新聞部合特製

する占星術的思考に特化して行く要素が
有してゐると考へられる。又ギリシヤ思想史上重大なる意
義を有する所謂ピタゴラス學派の思想にも、同
様に占星術の考へとなり得る契機があつた。ピ
タゴラス學派が數學を重大視したことは周知
のことである。が、宇宙音と數との間に密接な
関聯あることが発見せられて以来、數を以て
存在の本質とし、數學によつて世界の法則
性を研究せむとしたものである。而して斯の
如く存在の必然的法則性を認めれば、自ら宿命説の宿

命説と合致する傾向ありしのみならず、彼等
紀元前六世紀頃よりピタゴラスはオルフェウス(Orpheus)
教と結びつくに及び、死後の運命を説くに到つた。
斯くしてピタゴラス學派の人々は、一方に於て
は學問的態度を採つて天体運動の間に合法則
性を求むると同時に、他方占星術的神秘主義
を信じ、星辰を以て見ゆる神であり、地上界
では見るすがらなる純粋性、美、完全性を具ふる
ものとして宗教的に崇拝した。即ち星辰はも
と云へその霊魂の住める故郷であり、又吉凶の不

一橋新聞編輯部

純なる靈魂が幾分か生れ替つて次第に純化せられ、遂に永遠の居住となるすき安住の家である。

斯のごとき。

斯のごとくギリシヤには古来運命（Fate）の信仰あり、且又ピタゴラス派、プラトン、アリストテレス等の思想の中にも占星術となり得るべき性質が包含せられてゐたのである。

普遍主義的傾向強きギリシヤに於てはかゝる神秘的要素が或に成るべき筈なれども、アレキサンダー大王の東征により（東洋教の要素が取入られ、）所謂ヘレニズムの文化が生ずるに至はギリシヤには占星術は無かつたと称し

ても差支ないほど微弱にあつた。

元来エヂプトには（Sternaberglauben）なるものがあつたが、星は或る日が特定の神と特別の関係ありとするのみであつて、それが星に関係ありとするものではなかつた。

紀元前二千年頃

星學をバビロンより伝へ、星を宗教的に使用してこれより祭壇を得ると云ふ考へが発生して以来アレキサンドリヤを中心として盛に

所謂占星術は

なつてゐる。

当時カルデヤ（Chaldäa）の徒と称せられた魔術者が安人に重んぜられ、一

一般消費税合格製

方に生れたときの星の地位により其人の運命が定まり、又其時其時の星の配置に従つて事件の成否如何豫定せらるると説くと共に、他方また横字。じなひ其他の方位に天上の星の霊を地上に呼び下し、之を強制して運命を変更する魔術めいとなして護符の類が盛に発賣せられたのである。

当時占星術を大成したのはクラウディウス・プトレマエオス（Claudius Ptolemaeus）であり、其の四冊の書物（Tetrabiblos）は占星術のバイブルとせられてゐる。彼はギリシヤの伸

々を各個の星に配合し、各個人の誕生の時刻を其人の運命に結合せしめむとした。斯の如き宿命説はもともとギリシヤの意志自由の考へとは相容れぬものである。プトレマエオスは此点を、人は認識の力により星の支配から大体を逃れて自己の運命を豫知することが出来れば身は必然の鎖の中にあり乍ら常に且つ安心をはられるとなし、又人間は許されて範囲内に於ては自由を有するものと解して脱印せむとしてゐる。（北条角より）

此占星術はエピキュール（Epikuros）の

・経済資料合特製

徒弟に依つて迷信として排斥せられるか、宿命説を信ずるストアの哲人等は多くこれを信じ、紀元前[illegible]頃の人ポンポニウス（Pomponius）かこれを承認するに及び、知識階級のあにも広く信用を増得するに到つた。

暗くてへレニズム時代の思想は、ギリシャ時代の明朗なる運命（定）より陰鬱なるハイマルメネー（Heimarmene）、アナンケー（Ananke）（両者何れも暗き運命を意味す）の信仰となり、遂に解脱教に迄発展して行つた結果である。既述の階層的世界構造

は此の如き時代思想を満足せしめるが為に考出せられた因子である。之に対してキリスト教は如何なる地位に立つたであらうか。

キリスト教が特プラトン主義を採入れて、知的なるギリシャ人の間に布教せんと努力したことは周知の事実であるが、キリスト教とギリシャ思想との交渉は之に止るものではない。占星術の信仰は逆に[illegible]の中にも採入れられてゐるのである。使徒達は多く占星術を以て神を信ずること、説きかつ故に被造物神なる星を

信ずるものとして星を排斥しているが、彼は信者の間に一般であつた占星術の信仰は何時の間にかキリスト教の中に入り込み、バイブルの中でも「ヨハネ黙示録」の如きは其最も著しく斯の如き傾向を示している。蓋しキリスト教は神を以て凡ゆる力の源泉、総てのもの、創造者と見做す故に、――而して其創造力は人間には理解し得ざる非合理的なるものなるが故に――神力の中に採入れられることが出来るので

あらう。斯くてキリスト教の祭日は天文の事象と聯絡して考へられ、四世紀の中頃以来キリスト出生の日を十二月廿五日即ち冬至の日と定めて、キリストを光の神と見做す傾向を示し、又日曜日を以て「主の日」と為し、其他の祭式にも太陽崇拝、天体崇拝の要素を入れてゐる。教父達の中でもギリシヤ人は兎角占星術に對する信仰を許す傾向を有してゐた。即ち彼等は、星は働く力を許すものではなくして単に地上の事象を指示するものとなし、神のみが唯一の

一橋出版組合特製

活動力の源泉となナキリスト教の信仰と占星術とを両立せしめむとした。之に対して比説はテルトゥリアン（Tertullian）は反を称し、キリスト出生を以ては神は星を通して神意を天啓し給うたが、キリスト出生以後は神意は、キリストを通してのみ天啓せられると説いて教会の権威を主張した。又アウグスティヌスは、星の力は魔の力なれば神力によって駆逐せらるるものなることを力説し、キリスト教の豫定説は占星術の宿命説とは全然異る所以を

説いてゐる。併し乍ら更に角プトレマエオス以来の世界像――価値に従って階層的に秩序ねられたる世界構造――は教会の権威を以て認められ、中世の人々の一般的世界観となってゐた。トーマス（この説）ンが此世界像を最も明瞭に説き出してゐることは前述のごとくである。

中世時期にもつて自己意識の覚醒が興り、人類全体に対する利害よりは自己の運命に対する関心が強くなる。而も当時は社

一橋消費組合謹製

会組織動揺の時代で今迄の組合とか御印等の団体に於て個人の地位が重要になる。剰へ其個人の地位は、前にメディチ家に就て話したやうに栄枯起伏極まりない。同一のことを為すも成功することもあり、せぬこともあり、総じて自己の力以外に相当強い運命の力があって協力するに非れば成功は困難であると云ふ訳で、在来教会の保持せる世界像の体系の範囲内で自己の運命を豫知し、出来得べくんば其運命を左右せむとする欲望が起って来た。斯くて一方に於てはマキヤ

ヴェリの頃に於て述べた如く積極的に人間の力を以て運命の力を利用しようと云ふ主張乃至試みは自然の力を強制して人間に役立たしめようとする錬金術を生ずると共に、他方には吾々の力で此運命の奥に法則性を求めて之を知り、運命の力に受動的に服従せむとする傾向が起り、自然科学の方面に於ては占星術の復活となって顕れてゐる。占星術は日本の陰陽道と同一性質のものであり、先づ各個人の生れた時節時刻によって其人の守り本尊たる星が定まり、

それによって其人の運命が定まる、次に或特定時期の天体の構造如何に従って此女の出来事並に其結末が定まると云う信仰（を前提としている。此信仰から）天体の観測を出来得る限り精確になさむとする學問が発生すると共に、出征、國際交渉、旅行、建築等の時日は勿論のこと、起床、就寝、食事、入浴等の時刻迄も星回りによって定め、又星祭をなし、護符の類を或に用ふる等（イ）迷信が横行した。（或んに）

自然科學の発展には関係がない。（ロ）（併し作ら）労働の有力者たる國王、傭兵の頭領、都市廳等が各々（夫）同の天文學者を任用し、天文台の設備をなす等実際的目的から真剣に天文の観測をなさしめたところから、其方面の技術が大いに進歩し、間接に自然科學の発展に資するところが大であった。

占星術の復興は主としてアラビヤ人の文化を通じて行はれたものである。ビザンツ文化に於ても、八世紀以来占星術が入り、十一、二世紀に於ては（が）（ように）成盛になって、（占星術に）関する文

獻も無數に出てゐるが、西歐に占星術が影響を與へたのは主としてアラビヤを通じてゐる。マホメットはメディナ（Medina）に移つて以來完全に伸張本位の來へ、即ち人間の無力を說いて決定論の傾向を示してゐるので、占星術的宿命說は容易に其教義の中に吸收せられ得た。既に八世紀に於てエヂプトのテオフィロス（Theophilus von Edessa）七八五年死、はトマーの訳者）はカリフの王室天文長となり、占星術を以て凡ゆる學問の柱なりとなしてゐた。

他方アラビヤに入つたアリストテレス學のギリシヤ哲學は、前述の如く教會の教義に結び附くと云ひよりは寧ろ世俗的な科學、特に医學と結合して独立の発展の経過を辿つたのである。

（アリストテレスの學説を受継いだ哲學者の中でも、アヴェロエス（Averroes、一一九八年死）他の哲學者は占星術を多分に採入れた。彼等を通じて占星術は西歐に入り、ローマ、ペーコンの如きは之が研究に投頭したのである。

斯く如くアラビヤ人を通じて西歐に入れる占星術は、遊星の周期の観察を中心にして

一橋学園組合帳製

構成せられてゐる。例へば遊星の中最も重要なるものとせられた土星、木星、火星が同一の星座の中に結び附くことが總ての不幸、特に戦爭、饑饉、及乱、宗教的大事件等を生ずる所以であるとなしたり、又マホメット、キリスト、ルーター(後には)等の出生、乃至は一三四八年の黑死病等を遊星の周期に結びつけて解してゐるが如きかえである。斯くてアラビヤに於ては病気に際し医者に相談する前に占星家に相談し、國家的大事はもとより、日常茶飯

事に至るまで占星家の定む時刻に従つて行はれた。此占星術は先づ國務担当者、責任の重い宮廷に入り、各朝廷は相次いで專任の占星學者を任命した。イタリヤ都市の君侯、僧侶の頭領等が競つて之を使用したことは前述の如くである。十三世紀の著名なる占星術家グイド・ボナッティ(Guido Bonatti)はグイド・ダ・モンテフェルトロ(Guido da Montefeltro)に仕へたが、戦爭に出陣する前には必ず聖メルクナーレ(St. Mercurnale)の塔の上に立つて

一般財団法人 電力中央研究所

天体の観測を為し、塔上の鐘を打鳴してそれを相図に武士共の武装・乗馬・進軍等の命令を下した。報告によれば同作のことが一二二二年のフロレンツに於ても行はれたと傳へられてゐる。十五、六世紀には占星術が益〻盛になり、法皇の中でもピウス二世(Pius II)を除いては皆占星術を信用し、ユリウス二世(Julius II)が戴冠式の日取を定める時も、パウル三世(Paul III)が宗教裁判の時刻を定める時も皆占星家に相談し、レオナ世(Leo X)の如きは

ローマ法皇の大學(Sapienza)に占星學の講座を設けた。占星術の學問的研究はパドゥア(Padua)の大學が中心となり、ボローニア(Bologna)、パリの大學に於ても盛に行はれた。占星術を普及せしめむが為に、君主は占星術の規則を詩に作って暗誦の便に供し、或ひは絵に画かせたりした。火星、水星、木星・金星・日、月等が建築の意匠に用ひられ、又疫病(疫症)を土星から説明する等、占星術は非常な勢で擴つた。占星術は十八世紀の啓蒙時

採録資料合録製

代を通過し、今日迄伝つてゐる。

占星術の考へは所謂神話的思考（mythological idea）に其起源を有するものであるが、既に一旦ギリシヤ思想の洗礼を受けて体系化せられ、それが宗教的に（後世人間思想に再び）なつても、キリスト教に於ては凡ての力は神（後世人間）には不可知ではあつても神によつて統一せられてゐると考へられたところから、各個の個体は同一平面に存することになり、甚だしから数学的、統計的に研究せられる迄に発展し（得）たのである。（今日の所謂神話的思考形式と復活した原始人間思想）

惟の最も未分化の状態に於ては外界の事物は凡て魔力の保持者と考へられた。彼等にとつては一本の木、聳ゆる山、流る、川等は凡て生けるもの、魔的の力を有するものとして驚異の対象であり、彼等をおびやかすものとして押し迫つて来る。斯（彼等は）の如き不断の圧迫と恐怖から逃れむが為には、対象全体を支配するのではなくして、其対象の中で特に魔力を有すると考へられる部分を支配すればよいと考へる。而して（そのは）その部分は或（必ず）は、しも実質的な構成部

今である必要はなく、抽象的な形、乃至は名前であっても差支えない。人を咀はむとて駭の毛を切取り、雷の難を避けむとて雷に似た蛇を尊重し、乃至は呪文を称へる業は凡てかゝる思考法を其根柢に持つてゐる。即ち或特定の一部郎全体なりと云ふ方法である。斯の如き神話的思考が外界の諸事を統一的に理解するやうになり、宇宙全体を動かす法則が天体に於て最も純粋に現るゝが故に、天体を支配する法則を知れば吾々の生活を動かす運命をも豫知出

来ると考へるやうになれば、其処に占星術が出て来るとゝへよう。十五世紀になると殆んど人文主義者の間に、占星術の迷信的事実を面白り、自分それ自身に内在する法則を見出さむとする努力が生じて来た。即ち自分には厳然たる法則が支配し、神が其力を発する場合にも此法則に従はねばならぬ、更に神進んでは神自身も是に従はねばならぬと考へ、斯かる法則を見出す段として占星術を研究せしこと。今日の吾々から見れば迷信の如く思はれる占星術も、

一橋徳川家蔵書之印

自然に於ける法則の実在性を確信してその探究に努力する限り、近代自然科学の先駆と見做さるべきものである。之等古賢術研究家の最も典型的なるものとしてポンポナッチに就いて述べて見よう。

ピエトロ・ポンポナッチ（Pietro Pomponazzi, 1462－1525）は正に非常に長期に亘る天体の構造の変化を研究して、古来奇蹟と考へられた出来事を一々実証せむと試みた。彼は其著「天体の変動によりて説明せる自然作用の原因について（De naturalium effectuum admiranda causis sive de incantationibus）」に於て、古代及び

中世に於ける凡ゆる不思議、魔術、前兆、奇蹟等は、多少の傳説の誤謬はあるが、大体に於ては事実である、即ち古人及び吾々の経験の集積であるとなし、此事実として認めらるべき事象の間に一般に妥当する法則を見出さむとしてゐる。ポンポナッチは迷信を科学化するとと云ふか、若くは奇蹟を含める萬象を法則化するとと云ふか、兎に角事実を事実それ自ら

一種滑走銀合特製

に即して観察し、価値概念を排除して其自体に確法則を求めようとした。彼は事実そのものゝ内に奇蹟とか日常茶飯事とかの区別を認めない。不思議と云ふことは事実もしくはそれに関聯せる他の事実をはえかに観察せぬところから生ずるものであつて、若し観察が周到に隅なく行はれるならば、不思議とみへられたものも一定の法則に従つて生起したものであることが明かになる。況んや此場合事実の確定と事実の目的たる「何故に」を問ふことゝは厳に区別せね

ばならぬ。事件の目的たる「何故に」が分らぬことに於ては、日常茶飯事と雖も奇蹟と選ぶところはなく、事件の目的は信仰に依るの外は確定し得るものではない、と為してゐる。而して彼のゆき蔼を貫徹する法則は天体に於て最も明白に顕はれるから、天体の運行を見ることによりこれを知り得ると為し、在来鬼神(デーモン)の力、英雄の個人的意思決定の結果と見做されてゐたものを、總て宇宙を支配する根本の原因(Ursache)から説明せむとした。彼によれ

ば奇蹟とか不思議なことと云ふやうなものは、かかる事態かをずるやうな天体の配置が極めて稀に永い間隙を置いて生起するから、凡眼には不可解に見えるに過ぎぬと云ふのであらう。併しながらポ氏は仏教徒に於ては仏教徒の神とか鬼神とかを否定したのではないが、神が働く時には仏教の法則に従つてのみ働くものとなすと云はねばならぬ。

神界以外の神の影は極めて薄くなつてゐると云はねばならぬ。

従つて天体は神の意思の顕れである神意の表に対する中間的原因のみならず、

（神の詞と同地位にある）となりとなすところに彼の彼への特異な点があると云へよう。

ポンポナツチの態度は頗る学者的であり、知的である。彼は占星術の研究によつて将来を知り、之によつて運命を善い方に変換しようと云ふ実践的な態度を採らなかつた。

不思議を脱却せむと云ふよりは其不思議をも内に含む人工的法則を求めると共に彼は知的に極めて冷静であつたと云はねばならぬ。

彼は事実を重んじ、経験を尊重した。

彼は厳智的なものと感性的

一橋新聞組合謹製

なものとの相即関係を確信してゐる点に於て

文芸復興期に於けるアリストテレスの後継者とも云ひ得るのであつて、特にプラトンのアカデミーの學徒が感性より離れた純粋なる靈魂を求めたに対して著しき対立を示してゐる。ポンポナツチは在来の如く宗教的欲求から出発して世界像を定めるのとは逆の方向を採り、先づ宇宙の全体を観察することを出発点として人間の地位を定めむとした。即ち宇宙には上下高低の段階があり、是によつて人間の地位は定まるのであつて、

如何に跪けばとてそれ以上に出られるものではない。故に人間は其類に與へられる事質によつて運命が定つてゐるものとせねばならない。人類は宇宙全体の中に一定の地位を占め、個人は亦人類の中に於て其構成分肢として存するものであるから、個人は独立した自己の価値を有せず、只、類としての価値を擔つてゐるに止る。人間をして人間たらしむるもの、即ち人間を他の存在から区別する所以のものは、人間が考へると云ふ点にある。

アカデミーの學徒等は人間が思惟する存在である点に人間の不死なる所以を求めたが、ポンポナッチは之を認めない。（彼は思惟について次の如く考へてゐる。）即ち、思惟すると云ふことは個体を類の中に包摂する行為であり、従って人間を思惟すると云ふことは、自分も他人も并せて類に於て考へることである。在来は思惟を以て個人の外に向って働く精神の活動と考へられたが、（思惟の本質は個体を類に関聯せしめるところに存するのである。）思惟を以て永久に存在する超自然的なものの（如く考へる）のは誤りである。思惟は物を認識する力、即ち自己を

如実に見て、是を世界全体の中に組入れる力である。思惟は人間をして人間たらしめ、絶人間をして中間的存在としての位置を得しむるものである。動物は只個々のものを知覺するのみであって普遍者を思惟せず、神は只永久にして普遍なるものを直観し給ふ。独り人間のみが両者の中間にあって、個々のものを見る。若し人間にして思惟することによって同時に神を直観すると普遍者とならば、人間も亦神と同様に不死であると云は

一橋社会学研究会解題

ねばならない。併し乍ら人間は個のものに於て、
即ち変的なるものを通してのみ、概念を造り移るはさ
る普遍者へと努力するに止つてゐる。即ち人
間の思惟は普遍にして超時間的に安当する概
念を通して永久のものに接するか、之によつ
て先々の霊魂が感覚世界を脱して不死となる
のではなく、先々は依然として地上の人であ
る。思惟の内容は永久の存在性を有するも、
思惟過程は依然として時間の経過の中にあり、
思惟する主体としての人間は不死となり得ぬも

のでなければならない。人間は其霊魂が天上
界にあり、肉体が地上界に属すると云ふ意味
に於て中間者であるのではなく、其思惟が未
来時間と共に移り行くものであり乍ら尚不滅のものに
向つて努力すると云ふ点に於て中間者である。
霊魂不死の要求は斯の如き努力に基くもので
ある。併し乍ら霊魂それ自らは不死ではな
いとして、彼はアカデミーの霊魂不死論に反
対した。人間の霊魂は肉体と共に滅びるものである。
されば人間を理解せむとするには、
内よりのみ見るのでは足らず、宇宙に於ける

一般哲学論分析製

地位に於て理解するを要する。斯くしてポンポナッチは個人の獨自の地位を認めず、意思の自由と靈魂の不死とを否定せねばならなかつた。彼が占星術の宿命的考へを採り入れ得た所以も此所に於て理解せられるであらう。

此所迄考へ進んで来ればフローレンツのアカデミー派の自由主義——即ち人間は理性の力で何れの地位をも取得し得ると云ふ考へ——と、パドヴァ派の占星術の宿命説とが極端迄尖鋭化せられたものと云ひ得べく、両者共

に文芸復興期の自力に対する信仰、と自然の向に見通しをつけてゝを支配せむとする強い熱望から発したものであり乍ら、全く相反する結論へと進んで行つた。占星術に対する最も徹底的な論難はピコ・デラ・ミランドラ（Pico della Mirandola, 1463—1494）によつて行はれた。彼の占星術に対する反駁を要約すれば次の如くならう。即ち、占星術は所謂秘密科學（occulte Wissenschaft）に属するものであり、星の世界から何等かの影響が出物が下つ

環境整備合格印

て来る、ストアの所謂プノイマ(Pneuma)の如きものが天降って地上界に働きかける、と云ふ占星術的因果律(astrologische Kausalität)を前提としてゐる。併し乍ら因果関係とは吾々の現に経験するところのものを基礎とし、その現象それ自身の間の原因結果(を意味するもの)の関係に他ならず、一現象に直接に事実的に働きかける現象のみが其原因たるすぐれたものである。此見地に立てば天体の世界から地上の世界に事実的に働きかけるものは光と温のみであり、此光と温とを

介して天上界が地上界との関係を研究する限りに於ては、吾々は占星術に何等及ぼすものではない。然るに占星術は全く不可解なる因果関係を前提とし、天体の配置が地上の出来事を支配するものとなしてゐる。もともと天体の配置は吾々が天体観測の為(便宜の)に設けた記号に過ぎない(もの)であって、何等実在的な力を有するものではないのである。もとより吾々の数学―物理学的自然科学(mathematisch-physikalische Naturwissenschaft)と雖も自然理解の手段

株式会社原稿用紙

として記号を缺くことは出来ないが、其際用ひられる記号とは天体の配置に非ずして数学的記号である。斯くてピコは占星術的記号と数学的記号とを明確に区別し、自然の暗号は数学によつてのみ書かれて居り、吾々は理性の力によつて之を読み得て初めて自然の真理を観得し得るとなして、占星術を抛つた。斯の如くして、占星術を機縁として科学的な天文学が発生する基礎が築かれると共に、地上界の現象を因果的に研究すると云ふ自然科学の根柢が置かれたわけであるが、此因果

関係を見出す方法として分析（Analyse）を用ひることも当時の技術要求に起源を有してゐる。次に吾々は斯の如き方向を促進するに與つて力あつた錬金術（Alchemie）にも寛の目を向けることにしよう。

錬金術はもとエヂプトに於て黒學（Schwarz-Kunst）と称せらるものに端を発する。黒學とは、黒色のものは凡ての色の複合体であるから、之を黄、赤、白等に分けることが出来ると云ふ理論の下に、黒鉛から黄金を作らむ

一橋消費組合謹製

とした ものである。 之がヘレニズムの時代に
なり、ギリシヤの理論、即ち萬物は根本の質
料から変化したものであるから、各要素は互
に変化し得る性質がある、と云ふ思想を取入
れ、斯の如き変化を賞す魔力を持つたものと
して「賢者の石(Stein der Weisen)」哲學
者の水銀(Merkurius von Philosophen)」等が求め
られた。 錬金術は斯の如き形態でアラビヤから
スペインを通して欧洲に伝つたのである。 十四世紀
に於て王侯貴族等が財源の利組織を作らむが

為に黄金を必要とするにいたると、彼等は錬金
術を用ひて安価な鉛、銅から高価な黄金を作
らむとし、學者を傭ひ、研究所を設けて其研
究をなさしめた。 当時は魔術に対する信仰が
盛であつたが為に色々神秘的な形式がこに用
ひられ、ファウストの魔女の厨を彷彿たらし
めるやうな密室に於て、水銀、硫黄等の鑛物、
動物では猫の頭とか雛の生血、さては幼児の
血液や糞尿等の汚物種種、取合せ、ヘレトルヒト
で煮て賢者の石を製造せむとして。 併し乍ら

一歩清書原稿用紙

固より斯の如き試みが成功する筈はなく、人心は次第に批判的となり、錬金術の中にも魔術的のそれと自然的のそれとを分けて考へるやうになつた。學者達は所謂自然的錬金術（natürliche Alchemie）を研究し、分析的方法を用ひて、黄金（例へば黄色にして重い礦物であるから、黄色の硫黄と重い鉛とを混じたら出来るであらう等と工夫を廻らした（ベーコンの如き）。斯の如き実験の間に、種々の物質間に親和力の関係が求められるやうになり、物質を

実体としてではなく、他の物質との数的関係に於て研究するやうになり、茲に新しき自然探究の方法、即ち変化の間の法則を求める化學が成立した。此方向を進んで最も著しき人物にパラケルスス（Paracelsus, 1493-1541）なる医師がある。彼は吾々の五官に感ずる物の性質を分析し、いろいろな実験を用ひて種々の物質を燃焼したり冷却したりしてゐる間に甚物質の反應と見、其反應の間の法則を求めた。即ち物質間の関係の法則を求めた。彼は

燃焼の過程の媒介を通じて三つの根本実体（tres primas substantias）――燃ゆるものとして硫黄、烟を出し昇華するものとして水銀、燃えぬ灰として残るものとして塩――を求めた。

今日の化学に論理づくすき道を進んで。此際彼の云う三つの根本実体とは形而上学的実体ではなく、化学的作用の担い手として考へられた観念の産物である。

彼の観察は果してねるに上るものとしてあるか。

パラケルスは此方法から推論して、人体の変化の過程を他の無機体と関聯せしめた結果、

人体の構成要素は化学者の所謂物質と同一なりとの見地に到達した。勿論是は人体を純物質的に見たものではなく、寧ろ物質を人間的に見ようとさへ云へる者であるか、寧ろ彼は新しい方面を開拓したものとさへ得る。物理学、力学、光学等に於ても此時代には全体に新見地が発見せられてゐるが其等に一いては今は述べない。此等の科学的発見は何れも技術的欲望より個人の方面に反に無関係然研究によつて為されたものであつて、其等を統一

一橋消費組合帳製

ナる理論的根據を持たなかつた。是を統一して新しき科學に理論的基礎を與へたのは、十五世紀の中頃コレモ、デ、メディチかゞかゝつから逃げて來たキリヤを集めて建設せるアカデミーをプラトンの中心とするプラトン思想の復活である。

アカデミー派の學者達は、在來占星術に代よ錬金術たせよ、凡て教會の信仰とは無関係に發展し來れる狀況を改め、キリスト教の信仰をプラトン的若くは新プラトン派的に解釈す

ることによつて、ユダヤ思想とギリヤ思想を結合せしめとした。自然研究を神秘的欲求と調和し、統一せる世界觀を創造すべく努力した。

彼等を導いてゐたのは高き人間性の理念である。此派の理論的完成者たるピコは、其「人間の尊嚴について」の演説に於て人間の特別の卓越性を高調する。神は宇宙を造り終り、之を善しとしたる後にアダムを造つた。之その美しきを愛し、驚嘆の心を以て其偉大を讃

へむが為である。併し乍ら其時は既に宇宙の構造は完成して居て、人間の立入るべき特別の世界もなかつたので、之に告げて曰ふ、「われ汝を世界の真中に置けり、汝これによりて容易くその身のめぐりを見渡し、その中に在るすべてのものを見ることを得んかためなり、われ汝を、天に属ける者にもあらず、亦死ぬべきものにも死なるべきものにもあらざるものとして創造れり、汝をして自ら心のまゝに己れを形成りこれに打克つ者たらしめんと

欲すれはなり、汝堕して地の獣と等しきものとなるも、更りて神に似るものとなるも汝が心のまゝなり。獣は、その身に備ふべきものをば母の胎より携へ来る。高き霊は初めより、然らずとするもその後絶倫もなくして、彼等が永遠にしかあるべきものとなるなり。ひとり汝のみ発展をもつ、自由なる意思にまる成長を持つ、汝の中にありとあらゆる生活の種子を備ふ。」人間は構成する要素から「観察すれば、肉体に於ては地上界の分子を含み、

一橋研究所蔵

其霊に於ては天上界の要素を含む。感性的なる点に於ては獣類と異なし、精神的なる点に於ては天使に異らない。人間は小宇宙であつて、それ自身独立した世界として他の被造物即ち自然と対立し、星を観照し星を讃嘆する。神が世界を創造し給うたと同様に、人間は思索によつて世界の像を創造し得るものである。而して人間なる故以は、独立の自由意思を以て行動し、肉を制御し、自然的状態を克服して高き人間性の理念を実現するにある。

ピコは外的事物に支配されざる意思の自律性を深く感じてゐた。

斯の如く人間は自然に対立し、之を観察し支配する地位に立ち、自由意思を以て行動するものである。彼が占星術に反対した最も大なる動機は、彼の道徳意識が占星術の宿命観を許容するに忍びざるが故にあると思ふ。斯の如く人間は自然と対立し、理性の働きによつて自然の像を創造し、之を認識することが出来るが、其認識の最も高き方法は数学である。アカデミー派の人々はプラトンに倣ひ、数学の対象を高調した。此流の祖パッサリオン

一橋清書原稿用紙

Barbarian, 1/4/2) は既に、数学はプラトン思想の中でも最も重要な部分を占めるものなることを説いてゐる。蓋し数学は理性の働きによつても系上つて知識である。元来理性はキリストと同体なるものであり、神の性質と人間の霊の境界にあるものであつて、其働きによつて凡ゆる認識は生ずるのであるが、其認識の中で特り数学的認識は経験界の雑音を混ぜず、純粋に理性の働きによつて見出さるゝものであるから、数学以外には神の原像 (Urbild)

を認識せしめる方法はない。フィチノ (Ficino) (433—1499) もピコも彼の如き考へを受け継いで、数学に特別地位を高調してゐる。併し乍ら彼等の用ひる数学は幾何学である。即ちプラトンが扨のイデアを幾何学的形態で捉へむとした。彼等も事物を其形に於て、即ち静的に認識した。従つて物と物との関係も、其等の間の調和、構造を見る所謂造形美術的に観取せられたものであり、動的な変化の間の関係を見てゐたのは少い。従つて彼等が数学を通して見てゐた自然

一橋学園図書館

は、依然として新プラトン派のそれの如く階層的なものであり、多分に構成的に描き出してやうな描造を有するものであつて、近世の自然科学の宇宙観とは凡そ縁の遠いものであつた。彼の如き多分に観照的態度を捨て、認識を以て活動と見、従つて之によつて認識せられる自然をも動的なるものと見做して、近世自然科学の一礎石を確定したのは二コラウス、クザーヌス（Nicolaus Cusanus 1401-1464）と云ふイタリヤに活動したドイツ人である。

クザーヌスは吾々の認識能力に於て、悟性と理性を区別する。悟性は神によつて造られる論、の個体間の関係を知る働きであり、與へられた個体を他の個体に関聯せしめて考へ、之を比較し、類別して概念を造ることを以て其特性とする。従つて悟性の活動の結果たる概念を集めて体系を造り上げても、数多の概念の境界が明かになると云ふだけの話で、それが果して個体の本質に合するや否やの明證は得られない。況や吾々の経験は極めて限

一橋図書館蔵

られたものであるから、今後新しい経験を得れば、それに従つて概念は変更せらるるであらう、此意味に於て恒性的知識は相対的である。

是に反して理性は、神にして人なるキリストと同體なるものであり、神界の最小限にして人界の最大限なる加故に、神が多様なる存在を作りつゝも其中に統一的意味を知ると同様に、理性による真の智識は雑多なる概念の間に統一を持してゐる。逆に云へば唯一の理性が働いて諸〻の概念を展開してゐる。神は萬

物を創造すべきすべての能性を内に含み、其すべての能性が現実となるところに個〻の事物が発生するのであるから、宇宙は一にして多であり、多にして一である。

存在の世界に於ては多であるが意味の世界に於ては一である。偖吾々の理性は此存在の世界から受ける衝撃を所縁と(其所に発生したる知覚)して是に働きかけ、其に形式を與へて種々の概念を造るものであるから、其概念の中には既に統一をなすべき意味が含まれてゐる。吾々は真に自己の本質を自覚すれば、凡眼には雑多に

見ゆる概念も唯一なる理性の所産に他ならぬことを悟り得るであらう。尤より吾々の知識は神の知識と同格に意味の世界に属するものであつて、存在の世界とは異れる平面に存するものではあるか、吾々の知識は人間にして神なるキリストと同位なる理性の所産であるから、同じく神の所産たる存在の世界と相対峙し、其シンボルと見做すことを得る。此点に於て知識の実在性と明證性とが保証せられる。ザーヌスは在来教会が保持して居た権威を人

間の理性に移し、所謂時間の世俗化（Verweltlichung）を行つたものと云ひ得よう。然らば如何にして吾々は彼の如き自覚に迄到達することを得るであらうか。

吾々の知識は理性によつて生み出されるものであるとは云へ、理性は単に（単独に）それ自体で存在するのでは働くことを得ない。理性が働かむが為には存在からの衝撃を必要とする。知識は彼の如き存在からの衝撃による感覚を材料とすることによつて成立するものである。

一橋新聞部合格製

併し乍ら感覚は主観的なるものであつて、客観的妥当性を主張し得るものではない。即ち感覚は種々なる要素の複合として與へられてゐるが、感覚内容は各人によつて異るものであつて、是を材料とする知識は誤りを伴い難いものである。彩の如く知識を其材料から見る場合には、客観的知識の尺度たり得るものは見出されないか、若し吾々が理性の働きそれ自身の内の性則を見出し得るならば、それは如何なる衝撃によつても活動する理性の法則なるが故に、

客観性を有し、人智にして同時に神智である。数学は蓋し此理性の働きの純粋形式を示す學問であらう。例へば幾何學に於て、円を定義して、円とは点より等距離にある点の軌跡なり為す場合、その円とは如何なる経験的図形をも意味するものでもなく、只思惟の働きによつて造られたものである。又直線とは二点間の距離と云ふが如き静的に考へられた有限なる定量ではなく、点と云ふ唯一の統一が動いて或点迄到着した状況であり、其線上の各点は皆同一方向に無限に進行すべき

可能性を内に含んでゐるものである。即ち点の中には線たるべき意味即ち方向が與へられてゐる。恰も神の知識の中には世界の意味乃至は方向が可能的に含まれてゐる如く、点の内には発動して直線となるべき力が含まれてゐる。此意味に於て数学は神の知識の象徴であり、意味の世界の純粋形式である。斯く数学の凡ゆる命題は全く感性的経験を必要とせず、内に含まれ、一なる数、点なる統一から出立して其働きの間に諸の形を展開せしむるものであるから、客観的

妥当性を主張し得るものである。総ての学問がそれに向つて努力すべき目標であり、諸学の真理性を判断すべき尺度である。

若し悟性にして概念を構成するに際し、諸の個体を比較し、其等の間に共通の徴を見出すことによつてこれを遂行せむとするならば、体系が完成して普遍的なものに遡れば遡る程益々内容が稀薄となり、普遍的原理から下つて個体の内容を理解することは不可能とならざるを得ない。

併し乍ら同じく悟性を用ひて

概念を作る場合にも、數學を手本として、個、のものが絶對者の動きの間に發生すると云ふ見地に立てば、普遍的原理は個体を統一的に把握し、個体の中には(あらゆる)普遍者の光が輝くのを見るであらう。一群の現象からそれを總括する概念を作るには、具体的な現象から特殊のものを取去り、共通の微を抜き出すことによって概念を作るのではなく、其等の特殊性が或る條件の下に発生し得るやうな本体、ゲーテの所謂イデーを求めねばならない。個、のものが全

体の特殊な場合であるやうに概念を作らねばならない。斯く考ふれば存在の意味も変ってくる。所謂実体とは物体それ自らではなくして、物体が有すると考へられる或る作用性(Wirksamkeit, Energie)であり、それが條件を異にするに從って種、の形をとると考へうればならぬであらう。差別界に於ける知覺は物を一空の空間的擴がりに於て見るが、理性は其物の原理と根源とを見る。「精神は水素之之」は物質に於て差別あるものの、限定さか

一橋滑書組合謹製

たもの、そして現実に存在するものとして見てゐたものを、今や流合せるもの、限定されざるものとして、単なる可能性に於て見るのである。」斯く理性は動きの中に静止を見、静止の中に動きを見、神の創造、神の活動を見る。斯の如く物が動きに分解せらるゝ故に、在来性質の相違と見られたものが量の差異と見らるゝことになるのみならず、何れの点も神の創造の方のシムボルとして、中に発展の可能性を蔵し、全体を代表してゐるもの

と見られ、故に、空間には上下高低による質的差別はなくなった。斯くて、スコラ哲学の見るやうな段階から構成せらるる世界像が倒れ、其所に自然科学的空間―即ち動きの場としての無限の擴がりが与へられ、コペルニクス(Copernicus)等の天体説成立の基礎が出来上った。此所に於ける礎石が置かれたのである。

以上述ぶる所に依って、イタリヤに自然科学の根本思想が成立した。即ち、

以上の如くして、ブルーノスまるドイツ人により自然科学の根本思想が成立した。即ち、

一橋消費組合帳製

(一)、自然を吾々に対立せるものと考へ、其自然それ自身に内在的な法則を求める。即ち在来の物理学に見らるゝ如き、宗教的解脱の欲望を満足せしめむが為に作り上げた段階的空間観を捨て、同質的な空間―作用の場としての理念的な空間―が考へられるに到つた。

(二)、法則を求めるに当つては、吾々の感触を通して得らるゝ具体的現象を分析し、最早や此以上は分解出来ぬ要素（物に非ず、條件な

り）を求め、其要素間の動き、若くは変化の間の法則性を求める。（法則性、即ち恒常性が精密に得られるところまで分析して要素に迄達するのであつて、実際に物を分割するのではなくこと に注意せねばならない）。更に斯くして得たる原則を再び結合し、事実を説明し得るや否やを経験的に実証する。何となれば吾々の理論は純粋数学以外は経験的要素の雑音を含み、得られたところの法則は仮設として意義を有するに過ぎないものなるが故に、其法則が現実に適

用されるか否かを実験して見ねばならない。斷くて初めて理論は技術的要求をも滿足せしめ得るのである。

(三)、求むるところの法則とはぎりゃ式の構造の原則(Konstruktionsgesetz)に作ずして、動きの間の法則なるが故に、甚研究の方法として用ひらるゝ数學もぎりゃ式の幾何學では不充分であり、新しい数學が要求される。法則は靜的な法則に作ずして構造の法則であり、自然は死せるものに作ずして、精神的なるも

別行

のと見られる。常時の自然科學は斯の如き性格を消し去ったものとも得よう。テレシオ(Telesio, 1508-1588)の如きも、自然はそれ自身に内在する原理に從つて研究されねばならぬ旨を強調してゐる。即ち形式と質料、現実性と可能性等の如き存来の論理學の概念を予め自分が持つて居て之を自然に適用するのではなく、これはならない。

各々は飽迄も実驗の方法により、各々に與へられた複雑な現象を分析して其中にある個々の要素を引拔き、其働きの結果を觀察して、其間に何時で

斯くして得らるゝ

も同一結果が得られるまでそれを徹底的に分析する必要がある。斯くして変化の間の恒常性が即ち法則である。併し乍ら吾々に與へらるゝ現象、即ち吾々の経験は限られたものであり、無限の現象の僅か一部に過ぎぬから、吾々の経験から帰納することによつて求められたる法則は不精確たるを免れない。是を確実にせむが為には、此法則を数學に関聯せしめて、所謂性質を分量に分解せねばならぬ。斯かる方法によれば、科學によつて知り得るところは狭いか

も知れぬが、知れる範囲に於ては確実である。

と云つてゐる。

番飛つて思ふに以上の如き立場は、結極自己と自然とを対立せしめ、其中間に理性若くは數學なる平面を作り、此平面に於て自己と自然とを結合する。即ち此平面に於ては自己を支配する法則が同時に自然の法則であり、自己を知ることかとりもなほさず自然を知る所以となるであらう。此立場を明白に自覚したのはカロルス・ボヴィルス（Carolus Bovillus,

(1470-1553)である。彼によれば、吾々が自然を研究することの意義は、吾々に固有なる人間性の本体及其理想を明白に捕ふるに在る。即ち自己を知らむが為に外界の自然を研究するのである。蓋し吾々が自然の間に見る像は、結極吾々の性質の反影であり、其法則性を偽瞞なく表現せるものであるから、大宇宙の法則を研究することは小宇宙の法則を明確に認識する所以である。理性は雑多なる感覚に自らの法則性を以て形式を與へ、外界の概念を作ること

によつて自己の法則性を知る。即ち外に働き出でる状態にある理性——即ち内に總てのものを含むところの統一点たる自己——は外に働き出でることによつて多の世界に没頭し、其多の間に再び統一を求めることによつて、自己自身の本質を明確に自覚する。外界の自然に沈潜し、自らを忘れて其研究に没頭することにより、終つて自己自身の本性を明にする、之がルネッサンスの自然研究者の最も著しき特性をなすものであらう。

レオナルド・ダ・ヴインチ（Leonardo da Vinci、1452―1519）の考へも大体之と同地位にあると云ひ得る。彼はクザーヌスの傳統に従つて數學を尊重した。彼によれば、自然の向に法則を見出すと云ふことは、吾々が必然的に然かく考へさるを得ざる法則―即ち數學的法則―を自然の中に押し込んで見ることである。吾々が日蝕を觀測する際に、是を見ると目がつぶれるから、是を水に寫して間接に見る如く、神意の天啓たる多彩なる

自然を研究する場合には、自然を吾々の眼前に展開されるが儘に見たして、是を數學の平面に寫して見ねばならない。必然的な而も正確な知識は數學的方法によつてのみ得られ、數學的証明をなし得るか否かと云ふことは、學問の正確さを示す試金石である。

數學の最高の確実性を輕蔑するものは、其精神を恨むべし。

過ぎざるソフィストの詭辯を、決して沈黙せしめ得ぬであらう。」

勿論數學的方法を使用

一橋消費組合謹製

するには経験――感性的知覚を必要とする。
併し乍ら数学的方法は、此経験から出発して
帰納的に普遍的な原理を求めるのではなく、
全く吾々の理性が感性的知覚を所縁として動
き出して係を作る其活動それ自らの法則を求
むるものであるから、それによつて捉へられ
たる法則は絶対的な必然性を有する。経験は
数学的に把握せられた限りに於て真の経験と
なり、自然は数学的に捉へられた限りに於て
「自然」である。経験は数学に於て初めて完

成し、数学は経験に於て初めて其実を結ぶ。
併し乍ら現象の分析なくしては経験の本質を
顯はにすることは出来ない。分析とは複合せ
る現象の中に組み込まれてる各要素を別々に抽出し其他
自然活動を為材やうな状態に置くことである。
之が即ち実験に他ならない。レオナルドの自
然研究は数学と実験との二つの根柢の上に立
つてゐる。複合せる現象を実験によつて分析
し、数学的に計算して常に同一な結果が得ら
れる所まで進んで不すべからざる要素に到達し、逆

横浜市立図書館

に其要素から出立して現象を再構成すること
が出来れば、其所に自然の内の合法則性と必
然的な因果性が得られたと云ふべきである。
勿論現象の世界は特殊的なものとして吾々に
與へられてゐるに過ぎず、従って吾々には理性に
よって捉へらるべき無限に多様なる世界の一
小部分しか與へられて居らぬものであるから、
之を分析して獲得する吾々の知識は量的には
制限せられてゐるが、知ることの出来る範囲
に於ては正確である。以上の如きレオナルド

の自然研究の態度を見るに、やはり自然の世
界に先づ目を向けてそれを忠実に観察し、そ
の中に理性の法則——即ち数学的法則——を
投入して見て其間に必然的な法則を求める。
理性は自然の間に自己の法則性(必然的な)が形をとって
展開されて居るのを見、客観化された自己自
身を直観する。彼は敢って云ふ、「おゝ、驚嘆
すべき必然性よ。世は最高の理性を以て、凡て
の現象を其原因と結びつけ、すく強制し、あ
らゆる自然の働きは、最高の背くすからざる法

福沢諭吉伝記資料

auf die Kunstgerechte Weise
(Cassirer: S.168)

則に従って最も簡明なる仕方にて汝に服従す。

人間性を神的直観にまで引上ぐる此の奇蹟を誰か説明し得るものぞ。おゝ、精巧なる自然の力強き武器よ。汝あるが故に穢てのものは神と時と創造的自然に與へし法則に従ふなり」

イタリヤにはギリヤ風に形態を彫塑的に見、見を美的に鑑賞すると云ふ風が依然として或であり、且又自然研究の手段として用ひらるゝ数学が主として幾何学であつた為に、未だ動的なる法則を発見するに到らず、全くプラトニズムを脱却することを得ずして、つゝのであるが、とにかくクリスチャンの影響が強かつたボルトルスやオルトルス等は、吾々が自然の間に見る諸の姿は、結局自己の偽らざる反映であり、自然の合法則性は吾々の思惟の合法則性に他ならず、自然を知ることは自己を知る所以、自己を知るは自然を知る所以に他ならずとなし、自己と自然との間に理性を介することによつて主観と客観との調和を見出し、文芸復興期のイタリヤ

一般復興図合解説

思想に一應の完結を與へてゐるものと云はねばならない。

一般稿用合特製